

Title	女性の「儀式」と「血」の色 : アリス・ウォーカーの『喜びの秘密』
Author(s)	阪口, 瑞穂
Citation	Osaka Literary Review. 36 P.104-P.117
Issue Date	1997-12-20
Text Version	publisher
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/25367">https://doi.org/10.18910/25367</a>
DOI	10.18910/25367
rights	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

# 女性の「儀式」と「血」の色

## — アリス・ウォーカーの『喜びの秘密』

阪 口 瑞 穂

### I

アリス・ウォーカー (Alice Walker, 1944-) は、これまで、その作品の中で、一貫して、女性に対する抑圧を描き続けている。ウォーカーは、自らをウーマニストと称し、次のように定義している。「ウーマニストとは、黒人、または、有色人種のフェミニストである。また、性的に、あるいは、プラトニックに女を愛する女であり、女性の文化、女性の感情の柔軟性（涙も笑いに劣らず大切であると考え）、女性の強さを尊ぶ女である。」<sup>1)</sup> さらに、ウーマニストは、分離主義者ではなく、人は皆平等であると信じていると続く。ウォーカーは、アメリカの黒人女性にとどまらず、他の国々の女性の問題へと、少しずつ視野を広げようとしている。このような姿勢が反映されて、ウォーカーの4作目の小説、『わが愛しきものの神殿』 (*The Temple of My Familiar*, 1989) では、南米から移住してきた女性たちの苦難が語られており、その語りは、作品の重要な柱の1つを形成している。さらに、5作目の小説、『喜びの秘密』 (*Possessing the Secret of Joy*, 1992) では、アフリカの女性に対する「生殖器切除」 (“female circumcision”) という問題を取り上げている。このように考えるのであれば、ウーマニストであるウォーカーがアフリカの女性に目を向けることは、少しも不自然なことではない。むしろ、アメリカ黒人にとっての先祖の意味、両者の関係を常に考察している彼女が、アフリカの女性を問題にするのは当然のことと言えよう。ウォーカーは、アフリカにオリンカという架空の村を作り、オリンカの人々を自分の先祖のように考えているのである。

さて、『喜びの秘密』は、アフリカのオリンカという村の女性、タシの物語であり、彼女は生殖器切除という「儀式」を受けたのち、アメリカの黒人であるアダムに付き添われて、アメリカへ渡り、そこで一生の大半を過ごすことになる。本論では、切除によって主人公が受けた肉体的・精神的苦痛を明らかにするとともに、それらをどのようにして克服していったのかを考察する。今日においてもなお、このような「儀式」は、アフリカの国々や、アラブ首長国連邦などの中東諸国において、1億1千万人以上の女性に対して行われていると言われている。<sup>2</sup> しかしながら、麻酔なしに不衛生なカミソリやガラスの破片によって切除するため、出血やショック、細菌感染で死亡する場合も多いという。<sup>3</sup> このような女性の「儀式」そのものを公に議論するのはもちろんのこと、女性はその苦しみを語るのはタブーとされているが、<sup>4</sup> ウォーカーは大胆にそれを打ち破り、この問題を正面から取り上げようとしている。

宣教師である夫アダムに、タシは、自分を含めた他の多くの女性たちが苦しんでいる切除の問題を教会で話してほしいと訴えるが、彼はそんな個人的な事柄を持ち出すわけにはいかないと拒絶する。しかしながら、きわめて個人的な小さな事柄からより大きな社会の構造、男性による女性の支配、が読み取れるのである。フェミニストたちは、女性たちが直面している個々の問題は、極めて「政治的」な問題をはらんでいると示唆している。フェミニズムの批評家であるパーマーは、『「私的」な領域と、『公的』な領域の境界線は、これまで取り払われる努力がなされてきたが、フェミニストが、性の政治学に焦点を当て、また、それに必要不可欠である『個人的な事柄は政治的である』ということを認識したために、ある程度、取り除かれたのである。』<sup>5</sup> と説明している。ここに、「性の政治学」(“sexual politics”)という言葉が挙げられているが、この語は、もちろん、ケイト・ミレットの著書のタイトルからきている。この語は、ミレットの造語であるが、アメリカではすでに新語として定着している。ミレットは、「政治」という語を、「権力構造的諸関係、すなわち一群の人間が他の一群の人間に支配される仕組みをさす

もの」ととらえている。「性の政治」とは、男性の抑圧と支配、女性の被抑圧と従属の関係を意味する言葉であろう。

本論に入る前に、この小説の形式について、簡単に触れておきたい。全体は、21の部分に分けられ、それぞれの部には、タイトルのついた章がいくつか折り込まれ、合計73の章から成っている。タイトルはすべて登場人物の名前で、使われている登場人物の数は8人である。しかしながら、全体の6割程度は、主人公タシが占めている。タイトルに使われているタシの名には、いくつかのヴァリエーションがある。タシは、アメリカに移住したのち、イーヴリンと改名する。また、結婚してジョンソン夫人になる。したがって、タイトルには、タシ、イーヴリンの他に、タシーイーヴリン、イーヴリンータシ、タシーイーヴリンーミセス・ジョンソンがあり、1番最後には、タシ・イーヴリン・ジョンソン・ソウル(魂)となっている。これらのタイトルと章の内容とは密接なつながりがあるように思われる。例えば、タシーイーヴリンあるいはイーヴリンータシの章では、タシに何らかの精神的な変化を与える出来事が挙げられている。本論では、これらの章を中心に考察する。また、小説の最後の方に、タシーイーヴリンーミセス・ジョンソンという、彼女のフル=ネームがついた章が2つあるが、それらの章は、タシが精神的苦痛を克服して、自分の置かれている状況を認識する姿を描いている。この小説には、全知の語り手は存在せず、それぞれの章において、タイトルとなっている登場人物が、その人物の視点で、一人称で物語を語る。第三者の視点を介在させないこの形式は、いろいろな意味で深い傷を負っているさまざまな人間の心情を吐露するのに有効な方法であると言える。また、この小説の時間について言うならば、出来事は時間の流れにそって配置されておらず、むしろ、時間の流れとは逆に並べられており、過去と現在が交錯し、複雑な様相を呈している。

## II

この小説の形式について理解したうえで、内容について考察を進めていきたい。まず、小説の最初の部分で、姉デューラが生殖器切除によって死亡したことで、タシが切除を行う人を殺害したことが暗示される。この2つの出来事は小説の中で重要な意味をもっている。デューラの死は、次のように示されている。

We did not know that on the morning we arrived in the village one of Tashi's sister had died. Her name was Dura, and she bled to death. That was all Tashi had been told; all she knew. So that if, while we were playing, she pricked her finger on a thorn or scraped her knee and glimpsed the sight of her own blood, she fell into a panic...<sup>6</sup>

オリヴィアがアダムとともに宣教師の父に連れられてオリンカの村を訪れ、タシに初めて出会ったとき、彼女は声をはりあげて泣いていた。タシが最も慕っていた姉が出血多量で死んだからである。以来、タシは、「血」を見ると恐怖におびえるようになる。この時点では、読者は、オリヴィアとともに、デューラがなぜ死んだかを知らされていない。しかし、読者は、“bled to death”、“blood”といった表現を記憶にとどめ、これらを手がかりにして、テキストの中のばらばらの情報をつなぎあわせようとする。このように、「血」の色、あるいはにおいが繰り返し描写されるが、このような「血」のモチーフは、作品のテーマと深く関わっている。次の引用からも、血なまぐさい殺人のにおいがする。

Yes, I say to the attorney, I bought three razors.  
Why three? he asks.  
Because I wanted to be sure.  
Sure of what?  
To do the job properly.

You mean to kill the old woman?

Yes.

That is all, Your Honors, he says. (36)

「弁護士」という語から、法廷での場面であることがわかり、被告であるタシはカミソリを使って、ある女性を殺害したらしいということがわかる。この出来事と、タシの姉の死という事件は、一見、無関係に思われるが、「血」を媒介にして、奇妙につながっている。同じように、生殖器切除、デューラの死、タシ自身の死に近い肉体的・精神的苦痛、切除を行う人の殺害、これらは「血」という共通項をもちながら、互いに深く関わっている。

次に、生殖器切除によって、女性がどのような身体的及び精神的影響を受けるのかを考察する。まず、切除の方法についてであるが、切除の方法は3種類あり、「クリトリスの先端を切除するスナ式はむしろ少なく、クリトリスと小陰唇全体の切除、さらにクリトリスと小陰唇、大陰唇を切除し、尿や経血を通す小さな穴を残して縫合して膣口を閉じる陰部封鎖（ファラオ式）を行っている。」<sup>7</sup> オリンカの村では、3番目の、最も過酷な方法、ファラオ式を行っているようである。このような方法で切除を受けた女性は、外観にもはっきりした変化が現れる。（“No one spoke of the other, the hidden scar, between Tashi’s thin legs. The scar that gave her the classic Olinka woman’s walk, in which the feet appear to slide forward and are rarely raised above the ground.” [65]）オリンカの成人女性は、皆、その歩き方に特徴がある。つまり、女性たちは、歩くとき、足をほとんど地面から離さずに、ひきずるようにするのである。当然、歩幅は狭く、素早く歩いたり走ったりすることは不可能であろう。生殖器切除と似たような習慣として、中国の纏足を挙げることができよう。纏足をされた女性もまた、移動の自由を奪われ、また、動けない姿は男性の性欲をかきたてたとされている。いずれにしても、両者は、極端な身体変更を女性に押しつけた男性側からのエゴイスティックな風習であると考えられる。これらの身体変更は、男

性の性的支配を物語っている。

切除を受けた女性は、日常生活において、歩くとき以外にも、さまざまな困難な状況において、苦痛を強いられる。

彼女は、今や、排尿をするのに15分ぐらいもかかるようになってしまった。月経は10日間も続いた。彼女は、月の半分ほどは、体がしびれて動かなかった。月経の前にも痙攣があった。その痙攣は、マリッサがとても小さな隙間しか残さなかったので、血がほとんど流れなくなったために起こったのだ。彼女は、タシの膺のぎざぎざになった傷口をとげのようなもので縫い合わせたのち、わらを入れて、傷が癒えるときに、傷口が完全にふさがってしまわないようにした。痙攣は、流れ出ることができず、体にも再び吸収されず、どこにも行くことができずにたまってしまった血液によって起こった。(64)

切除のときに、言語に絶するような痛みを伴うのはもちろんのこと、ずっとあとになっても、このように、日常生活においても、絶えず、痛みにさらされている。結婚したのちも、夫婦生活に大きな影響を与える。あまりの激痛に耐えかねて、夫のもとから逃げ出し、夫のもとに戻るくらいなら、死んだ方がましだと考え、自ら命を絶った若い女性の話が、小説の中で語られる。 (“She'd gone to her parents and asked them how they expected her to endure the torture: he had cut her open with a hunting knife on their wedding night, and gave her no opportunity to heal.” [136]) ここでは、女性の痛みを理解しようとしめない自己中心的な男性の姿が描かれている。男性は、女性の人格を無視し、快楽の対象として「もの」のように女性を扱う。女性は、死でもってしか、その悲しみを表したり、怒りを訴えることができない。

### III

切除という行為は、女性に、肉体的な外傷を与えるだけでなく、その精神に

も深い傷痕を残すことは明らかである。切除を経験したあと、タシは、かつての快活さを失い、消極的になり、生き生きとした素早い身のこなしができなくなる。タシの恋人アダムの目にも、彼女の変化は明らかである。彼はまず、彼女のうつろな目に気づく。彼がやって来るのを見ても、喜んでいる様子はないし、以前のように期待に満ちて目が輝いたりはない。

精神的に深い衝撃を受けたタシは、狂気の淵から這い上がろうともがき苦しむが、周りの人々の協力を得て、少しずつ失われた感覚を取り戻し、自分の置かれた現実を認識できるようになる。タシは精神療法を受けるが、長い苦しみののち、ジ・オールド・マンと呼ばれる精神療法士に、少しずつ心を開くようになる。タシが最初に心を開いたのは、男性の医者であり、しかも夫の愛人に紹介された人であるという点は興味深い。あるとき、彼が、ある部族の男性が成人になるための儀式を撮影した映像を見せると、彼女に大きな変化が現れる。画面に大きく映し出された巨大な1羽の闘鶏を見ると、彼女は恐怖に脅え、失神しそうになる。このときに受けた衝撃を、彼女は、言葉ではなく、絵によって表そうとする。彼女は寝室の壁に、無我夢中で、恐怖に震えながら、映画で見たオンドリよりもさらに大きな闘鶏をかきなぐる。すると、彼女の絵の端に、人間の足が現れるようになる。オンドリも、足もどんどん大きくなっていく。ジ・オールド・マンは、彼女に、その足が男性のものか女性のものかと尋ねるが、彼女はわからないと言う。しかし、さらに、足の上に布の切れ端が描かれるようになると、タシは突然、その布は、切除を行うマリッサのものであると思い当たる。姉が切除を受けるために入った小屋の近くの草むらに隠れていたときの様子を思い出す。デューラの悲鳴が聞こえたのち、マリッサが小屋から出てきたが、彼女の足の指の間には、切り取ったばかりの性器が汚いものであるかのように、無造作にはさまれていた。彼女は、足の指の間にはさんでいたものを、ニワトリに向かって放り投げると、ニワトリは、それを一飲みにした。このような記憶がタシに蘇る。姉の性器を食べたのは、オンドリではなく、メンドリであったのに、



彼女はオンドリの絵を描いている。これは、彼女が意識の下で、切除が男性による女性の性的支配であると感じとっていたためであるかもしれない。

巨大な獣の絵を完成したのち、彼女は憔悴するが、何かつきものが落ちたような気がする。突然涙があふれてくる。姉の死を知ったときに受けた深い悲しみがどっと押し寄せてくる。医者姉の死を思い出したと語ろうとするが、まるでどに石がつまっているかのように感じられて、「死」という言葉をどうしても発することができない。

I knew what the boulder was; that it was a word; and that behind that word I would find my earliest emotions. Emotions that had frightened me insane. I had been going to say, before the boulder barred my throat: my sister's death. ...

I remembered my sister Dura's *murder*, I said, exploding the boulder. (81)

タシはついに、以前失った感情を取り戻す。まず、彼女を脅えさせ、狂気へと駆り立てることになった深い悲しみを。そして、悲しみの次には、激しい怒りを。彼女ののどをふさいでいた石がとれ、姉の「死」という言葉が発せられるが、その「死」という言葉は「殺害」という言葉にとってかわられる。姉は血を流して、自然に死んだのではない、殺されたのだという思いが湧き起こる。怒りという感情は、タシを次の行動へと向かわせる原動力となる。マリッサを殺すということである。最愛の姉を死に追いやり、またタシ自身にも、死に等しいような、肉体的、精神的苦痛を与えた張本人を殺してやりたいという衝動が起こるのを感じる。

狂気へと追いやられるほどの苦痛をもたらした原因を探り、それを人に語っていく中で、タシは、なぜ切除を受けさせられたのかを考えるようになる。タシは、今度はレイというアメリカの黒人女性の精神療法士に、自分の受けている苦しみを語っていく。タシは、レイに、女性が切除を受けるのは、女性の体の中の不浄な部分は切り取られるべきであると昔から言い伝えられて

いと、村の指導的な立場にある人に言われたからであると説明する。さらに、かつては性的な喜びを経験したことがあるのに、それを犠牲にしてまでなぜ切除を受けたのかとレイに聞かれて、タシは、生殖器切除は、オリンカの成人女性として人々に認められるための「儀式」であり、切除を受けていない女性は結婚することができないからである、と答える。

タシは、オリンカにいたときは、オリンカの慣習を何の疑問も感じずに受け入れ、それに従っていたが、アメリカに来てはじめてその意味を問い直すようになる。法廷では、頬に成人になったことを示す切り傷をつけたタシを、人々は野蛮人の典型であるとみなす。彼女の裁判を聴衆は面白がって見物し、裁判官は、気の狂った女性の言葉は聞いても仕方がないと、彼女の意見を真剣に聞こうともしない。アメリカ社会のアフリカ女性に対する蔑視が感じられる。こうした冷たい視線を浴びながらも、タシは自分は何者であるのか知ろうとしてもがく。切除が行われる理由を説明する際、“Our Leader”という言葉が出てくるが、部族の長は、神として崇められ、彼の言葉は、絶対的な力をもつ。彼は女性に対して完全な支配力を行使するのであるが、タシを含めた女性はそのことをあまり問題にしていない。切除という「儀式」は、男性が女性を支配するための一方的な押しつけであるが、女性はそれを無条件に受け入れてしまっている。というより、受け入れざるをえないのだ。「儀式」の意味を問うたり、それによる苦しみを語ることは女性には認められていない。それを逃れようとするれば、自殺した若い女性の例のように、死を選ばざるをえない。

タシは、思いもかけない人から、切除の別の理由を聞かされる。夫と愛人リセットの間にもうけられた子、ピエールからである。リセットはアルジェリア人で、宣教師活動を通してアダムと知り合い、フランスに移住する。タシに最初に精神的変化を与えた医師はリセットの紹介であったことを思い起こすと、タシとリセットは不思議な糸でつながれている。ピエールはフランスの文化人類学者の書いた本からアフリカの神話を紹介する。昔、人間は2

つの性を持っていた。男性は女性の精神を包皮に宿し、女性は男性の精神をクリトリスに宿した。男性の女性らしさ、女性の男性らしさを除去するために「割礼」が行われたという。男性は男性らしく、女性は女性らしくあらねばならないと教えているようであるが、これはもちろん多くの問題を含んでいる。

#### IV

次に、切除を行う人マリッサとタシの関係を考察する。マリッサは、デューラを殺し、比喩的な意味でタシを「死」に追いやった。マリッサの殺害によって、殺す人／殺される人の関係は逆転するが、やがて2つの対立関係は不明瞭になり、2人は同一視される。タシは、アメリカに年老いたマリッサが来ているのを知り、カミソリをしのばせて会いに行く。マリッサははじめ、タシが誰であるかわからないが、切除を行う小屋で激しく泣き叫んでいた少女であることに気づく。その泣き声はまるでこの世のすべての女性の泣き声を表しているかのようであったと語る。マリッサは、タシに、自分が代々切除を行う人の家に生まれたということ、切除を受けたときの彼女自身の苦しみ、切除を行う立場の人間になって人間としての感情を殺さざるをえなかったことなどを話す。こうした話を聞くうち、タシは、マリッサもまた彼女のように感覚が麻痺していて、自分の痛みを感じることもできず、泣くこともできないことを知る。彼女を抑圧していたと思っていた人が、彼女と同じように深く傷ついていることを知ってタシは驚く。切除を受けた人の気持ちだけでなく、切除を行った人の内面も描かれていることは重要である。両者とも男性の支配原理の犠牲者なのである。

マリッサは、タシに初めて会ったその瞬間から自分の死を予見し、彼女が殺されることの正当性をタシに理解させようとする。

One day, as I was washing carefully between her clawlike toes,

she informed me blandly that it was only the murder of the *tsunga*, the circumciser, by one of those whom she has circumcised that proves her (the circumciser's) value to her tribe. Her own death, she declared, had been ordained. It would elevate her to the position of saint. (204)

切除を行う人、ツンガは、切除を受けた人に殺されてはじめて自分の価値を示すことができる、とマリッサは言うが、このように言い伝えられているのか、それとも彼女の嘘であるのかは定かではない。タシは殺害を勧められることによって、かえって殺意を失ってしまう。ところで、タシがマリッサを本当に殺害したのかは、実のところよくわからない。彼女の無実を信じるオリヴィアに対して、そうかもしれないし、違うかもしれないとあいまいに答え、次のように続ける。

You are right, Olivia, that I did not kill M'Lissa... M'Lissa did die under her own power, which, even at the end, was considerable; she seemed to get stronger, rather than weaker, with age. Hers was an evil power, barely acquainted, any longer, with good. It is for not killing her... that I am guilty. (250-51)

殺してはいないが、彼女を殺さないために罪深いのだと、タシは言う。小説の最後には、彼女は、カミソリは使わず、マリッサの顔の上に枕を置いたと説明する。そうすることが彼女の使命であると考えたからである。

以前、タシは、指導的な立場にある人間の言葉に盲目的に服従していたが、今は男性の押しつけた「儀式」の意味を理解している。男性は、切除を行う人、ツンガを女性支配の道具として利用していたのだと、タシは気づく。感覚が麻痺していたマリッサは、タシに自分の話を語ることによって、徐々に人間としての感覚を取り戻し、男性に対して怒りをおぼえるが、その怒りと抗議の気持ちがタシの中に芽生えたのを確認して、タシの手による死を選んだのかもしれない。タシの中にマリッサの精神が引き継がれていることは、

小説の形式からもうかがわれる。マリッサの名前が最後に現れる章は、最初はマリッサの語りで始まるが、途中から人称が入れ替わり、タシが一人称でその章の残りを語るようになる。マリッサの心は、途中でタシの心の中へ移行し、吸収されてしまうかのようなのである。

小説の最後は、タシの処刑の場面で終わるが、悲壮感や重苦しさは感じられず、むしろあたたかさ、安らぎ、希望の光が見いだされる。タシの処刑は広場で行われるが、タシを支持する女性たちが子供たちを抱えて押し寄せ、死刑に対して抗議のデモンストレーションをする。女性たちのたくましい様子はこっけいで、微笑みすら誘う。

The women along the way have been warned they must not sing. Rockjawed men with machine guns stand facing them. But women will be women. Each woman standing beside the path holds a red-beribboned, closely swaddled baby in her arms, and as I pass, the bottom wrappings fall. The women then place the babies on their shoulders or on their heads, where they kick their naked legs, smile with pleasure, screech with terror, or occasionally wave. It is a protest and celebration the men threatening them do not even recognize. (278)

赤ん坊につけられた「赤い」リボン (“red-beribboned”) は、もちろん、その子が女の子であることを示している。この「赤」は注目すべき色である。「赤」は「血」の色であり、「女性」の色である。「赤」は女性の悲しみ、痛みを表していたが、ここでは女性に備わっている力、怒り、不屈の精神を表している。「負」のイメージで描かれていた「赤」が、小説の最後で、「エネルギー」をもつ色に変化する。タシが女性たちの前を通るとき、赤ん坊の腰を包んでいる布が取り払われたのは、自分たちの子供には切除を受けさせないとタシに示すためであろう。不当な抑圧に対して戦うことを誓う女性たちの姿がユーモラスに描かれている。処刑の直前に、タシは “The Secret of Joy” の意味を確認する。

In front of them kneels my little band of intent faces. Mbatu is unfurling a banner, quickly, before the soldiers can stop her... All of them — Adam, Olivia, Benny, Pierre, Raye, Mbatu — hold it firmly and stretch it wide.

RESISTANCE IS THE SECRET OF JOY! it says in huge block letters.

There is a roar as if the world cracked open and I flew inside. I am no more. And satisfied. (278-79)

抵抗の精神が、女性のみならず男性にも受け継がれているのを確認して、安らかに、微笑みを浮かべて死を受け入れ、主人公がその生涯を閉じるところで、この小説は終わっている。

ウォーカーは、『喜びの秘密』の中で、生殖器切除という、アフリカの多くの人々の健康と人間としての「完全さ」(“wholeness”)を蝕む慣習について描いていると言う。<sup>8</sup> あらゆる人間が身体の一部を失うことなく、また、精神も脅かされず、心身ともに健やかに、「完全」に生きるということ、ウォーカーは、そのすべての作品の中で追求している。ウォーカーは、また、この慣習に関する記録映画を製作するが、映画と同じ題名 (*Warrior Marks*) の書物に、アフリカへの撮影旅行、人々へのインタビューの様子を収めている。この映画のメッセージは次のようなものであるとウォーカーは言うが、これは、もちろん、小説のテーマにも通じるものであろう。

If, in fact, you survive your mutilation, and the degradation that it imprints on soul and body, you still have a life to live. Live it with passion, live it with fierceness, live it with all the joy and laughter that you deserve.<sup>9</sup>

ウォーカーは、たとえ切除を受けても、「喜び」や「笑い」を忘れず、力強く人生を生きるべきだと言っているが、アフリカの女性たちの中には、すでにこれを実践している人たちがいる。切除を受けていても、女たちはさまざまな形で自らの創造力 (“creativity”) を発揮する。不毛の荒地を開墾した豊

かな「緑」の農地 (“fertile green farms”)、美しい「色とりどり」の布 (“beautiful, colorful fabrics”) から成るドレス、これらは、女たちが経験した痛みを克服するために生み出されたもの (“a creative reflection of women’s pain”) である。<sup>10</sup> これらの鮮やかな「色」は、小説の最後に「未来」を表す赤ん坊につけられた、リボンの「赤」と同じく、「変革」の可能性を秘めている。

## 注

- 1 Alice Walker, *In Search of Our Mothers' Gardens: Womanist Prose* (New York: Harcourt Brace Jovanovich, 1983), p. xi
- 2 フラン・P・ホスケン (鳥居千代香訳) 『女子割礼』(明石書店, 1993), p. 94.
- 3 ホスケン, p. 89.
- 4 エジプトの女性作家 Nawal El Sadaawi は、*The Hidden Face of Eve* の中で、自らが6才のときに受けた生殖器切除について描いたが、この著書のため、また、女性のための組織を結成したため、投獄される。Alice Walker and Pratibha Parmar, *Warrior Marks: Female Genital Mutilation and the Sexual Blinding of Women* (New York: Harcourt Brace & Company, 1993), p. 35-36.
- 5 Paulina Palmer, *Contemporary Women's Fiction: Narrative Practice and Feminist Theory* (New York: Harvester Wheatsheaf, 1989), p. 43.
- 6 Alice Walker, *Possessing the Secret of Joy* (New York: Harcourt Brace Jovanovich, 1992), p. 8. 以下この作品からの引用はこの版により、ページ数のみを記す。
- 7 館かおる『読む事典・女の世界史』(新曜社, 1987), p. 36.
- 8 Alice Walker, *Anything We Love Can Be Saved* (New York: Random House, 1997), p. 126.
- 9 *Anything We Love Can Be Saved*, p. 148.
- 10 *Warrior Marks*, p. 193, p. 197.